

平成30年度

# 「私を変えた先生との出会い」 エピソード集



宮崎県教育委員会





## 大好きな先生

私が小学校のある学年のとき、クラス全体が先生の指導に従わず勝手に行動をしていました。その頃はまだ幼く、悪いことをしているなんてことは何一つ思っていませんでした。自分でも今思えば、先生方は本当に大変だったと思うし、たくさん迷惑をかけ困らせたと思います。

そんな私を変えてくれたのが、中学校2、3年生の2年間担任をしてくれた先生です。とても幼かった私たちの話をたくさん聞いてくれて、間違っているときは厳しく指導してくださいました。

みんなその先生が大好きでした。先生がしてくださる話はいつもおもしろく、若い頃は私たちの境遇にも似ていて共感するところも多く、その中で私たちが変な道に進まないようにしっかり指導してくれました。

小学校のときには、みんなの気持ちがバラバラで全くまとまっていませんでしたが、中学校最後の体育祭では、先生がいる団はこれまで全校団技で勝利したことがないという話を聞き、先生に初勝利をプレゼントしようとみんなで一致団結して練習しました。本番では勝利をプレゼントすることができず、みんなで涙をながしたことを覚えています。それでも先生は最高の体育祭だったとたくさん私たちを褒めてくれました。

私は、その先生がいたからこそ今の自分があると思います。今でも私の中で一番信頼している先生で、私の恩人です。こんなに素晴らしい先生と出会えたことを心から感謝しています。

今井 美結

(高校生)

## 夢を与えてくれた先生

「誰かの良いところを見つけられる人は素晴らしい人です。」

この言葉は、私の憧れの先生であるM先生がおっしゃった言葉です。

私と先生との出会いは小学校3年生の始業式の日でした。M先生は私の担任の先生になりました。先生のクラスになって、人の話は目を見て、うなずきながら聞くことや何事も諦めずに取り組みれば最後までやり通すことができるということなどたくさんのことを学びました。

その中で、一番印象的だったことは、先生のクラスになってからしばらくたった日のことでした。先生が「今日から『キラキラ郵便』をします。」とおっしゃいました。私はその内容を聞いたとき感銘を受けました。『キラキラ郵便』とは、友達の良いところを紙に書いて、教室のポストに入れるというものでした。友達が自分の良いところを書いてくれた紙は、その月の月末に自分の元に配られます。紙を貰うと、とても嬉しかったのを覚えています。また、自分自身で発見できなかった長所を見つけることができ自信に繋がりました。『キラキラ郵便』を実行したことで、喧嘩の多かったクラスも徐々に落ち着き、3学期の最後には、皆で先生にサプライズのお礼をすることができました。

先生の教えで、人は誰しも必ず長所があるということを知り、そして、誰かに自分を認めてもらえたことの喜びを実感することができました。

私は将来、小学校の先生になりたいと考えています。私がこの夢を見つけることができたのは、M先生に出会えて様々なことを学ぶことができたからです。そして、私が小学校の先生になったら、M先生のような子どもたちに夢を与えることのできる素晴らしい先生になりたいです。

小野 ひなた  
(中学生)

## 咲く勇氣

小学校6年生の秋。運動会の団長を決める時間。学級のだれも手をあげなかった。もちろん、私も。その時の教室には、面倒だ、だれかがやればいいのに、自分が目立つのは嫌だ、という空気が漂っていた。担任の先生は、こう言って私たちを説諭した。

「みんな、『咲く勇氣』という言葉を知ってる？みんなの中には、やってみようか迷っている人がいるでしょう。勇氣を出して手をあげてみなさい。いつもの自分を変えるいい機会だよ。」

それでも私たちはだれも手をあげなかった。

「しょうがないわね。一晩考えてきなさい。明日また話し合いましょう。」

先生はそう言い、その時間は終わった。

家に帰って、両親にその話をすると、中学校の教員をしている母は、自分の経験に照らし合わせ、私に話をした。

「担任をされていていちばん嫌なことは、学級の生徒にやる気がないことよ。明日『僕がやります』って手をあげなさい。先生にお世話になっている恩をここで返しなさい。」と。

『咲く勇氣』。この言葉が、その後から現在のいろいろな場面で、私の背中を押してくれた。団長は結局、私より先に立候補した友達がすることになり、私の『咲く』場はなかったが、その後、中学校に進学しても、係活動や部活動、先生や友達と接するとき、自分で勉強するときにも、つい「だれかがやってくれるだろう。」とか「仕事が増えて面倒だ。」などと後ずさりする気持ちを、後ろでがっちり受け止めてくれる思いがする。

面倒と思っても、引き受けてやってみると、案外簡単にできたり、周りの友達が手伝ってくれたりするものだ。友達の意外な一面を発見したり、そのおかげで自分も成長したり、いいことが多かった。ほんの少しの『勇氣』をもつことで、自分を表現できる。この世の中を生きぬいていける。そんな言葉を教えて下さった先生に、私は小6で出会った。

川井田 翔

(一般)

## 壁を乗り越えて

「あなたが頑張っているのはわかっているんだから。」

この言葉は、私が中学生のときにO先生が言ってくださった言葉です。

今ではとても後悔しているのですが、私は中学生まで親に習い事を勧められても、面倒くさいからという理由などで入らなかったり、入っても長続きせず、すぐ辞めたりと何にも熱中することがありませんでした。しかし、私も中学生になり、部活動に入らなくてはならなくなって陸上部に入部しました。入部理由は誘われたから、他に入りたい部活動がなかったからとやる気のない理由でしたが、いつしか走ることが楽しくなり、陸上が大好きになりました。

そんな私でしたが、学校の成績が伸び悩んでいたこともあり、きつい練習から逃げ出したいほど部活動が嫌になった時期がありました。そして私は部活動を休みがちになりました。休みがちになったことで、何でこんなに私はダメなんだろうとさらに落ち込みました。そんな時、声をかけてくださったのが陸上部の顧問であるO先生です。もちろん休みがちになったことについてはおしかりを受けました。また、私の足りていないところをしっかりと提示してくださったうえでアドバイスもくださいました。そして「あなたが頑張っていることはわかっているんだから。」という言葉をかけてくださったのです。自分が嫌で嫌でたまらなかった私は救われた気持ちになりました。私を見てくださっていたことがとても嬉しくて涙が出ました。

陸上部で過ごした3年間は私を変えてくれました。そのきっかけをくださったO先生には今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

木宮 成美  
(高校生)

## 目は心の窓

今から十数年前、私は県立日南高等学校に入学した。中学から始めた陸上競技を続けた  
いと思い、迷わず陸上部へ入部した。練習初日、運動場へ行くとK先生が立っており、挨拶  
をしに先生に近づくと「目は？」と尋ねられた。K先生の意図がわからず答えられずに  
いると「目は口ほどに物を言う。」と言われた。この言葉を聞いても当時の私は、なぜK  
先生がこのようなことを言ってきたのかがわからなかった。

それから私は進路のことで悩むようになり、先生や友人に相談することなく一人で抱え  
込んでいた。次第に、学校へ行くことが嫌になり学校から足が遠退いていった。K先生は  
心配して何度も電話をくださったが、私は放っておいてほしく電話に出ることはなかった。  
そして高校2年生の夏、自暴自棄になり退学届を書いた。この時、私は初めてK先生の涙  
を見た。「自分の為に泣いてくれる人がいる。自分のことをこんなに考えてくれる人がい  
る。もう少し先生のために頑張ってみようかな。」と思い、退学届を握りしめながら泣き  
じゃくっていた。残りの高校生活は、勉強と部活動の両立に励み高校を卒業することがで  
きた。

私は、K先生との出会いがきっかけで教員を目指すようになった。高校卒業後すぐには  
進学できなかったが、アルバイト等で学費を貯めて進学し教員免許状を取得した。

私は現在非常勤講師をしている。高校入学当初にK先生が「目は口ほどに物を言う。」  
と私に言った理由が今ならわかる気がする。きっと、私の心の中に抱え込んだ悩みや不安  
が顔に表れていたのだと思う。今もK先生とは連絡を取り合っている。私にとってK先生  
は恩師であり、目標であり、また、父のような存在だ。

黒木 葵

(一般)

## 名もなき「Mの定理」がもたらしたもの ～定年を迎える恩師への感謝状～

「Mの定理を知っちゃうか？」

インターネットで調べてみても検索にさえ引っかからない言葉だが、たくさんの受験生を救ってきた一流定理だ。もし、あなたが知っていたら私は予見しよう。「あなたは宮崎県出身で、A先生から学びましたね？」と。

このA先生こそが、私の高校時代の恩師である。部活動をサボり、宿題もせず、バンド活動の夢だけ見ていた高校生が、先生と出会い数学の面白さを学んだ。先生の授業は、数学というよりクイズ的な問いかけをしてくれた。お陰で徐々に数学が好きになった。学問とは不思議なもので、強制されると身に付かないが、好きになると没頭できる。高校3年、夏休み終了後の受験勉強の本格開始で、周囲からは絶望的と言われたが、勝負所と覚悟を決め受験に取り組んだ。しかし、センター直前の模試では「E判定」。家族を含め、誰もが諦めかけたとき奇跡が起きた。センター試験の数学、残り5分。通常の解答方法なら15分程度は要するものの、ズバリ「Mの定理」が出題され、5分程で一発逆転を勝ち得た。

更に「大学で地質学を学んでみないか？」と国立大学を推薦していただき、理系技術者としての人生を歩むことになる。大学卒業後、県外の企業にも勤めたが、やはり地元宮崎に恩返しできる人生を歩みたいと思い十数年前に帰郷した。

当然、理系技術者であるため、数学が全ての基本となり、今この瞬間を支えてくれている。現在は数多くのインフラ整備、災害復旧、宮崎県内行政技術者向けの講師等を通し、「故郷宮崎への恩返し」という自己実現も叶えることができた。

このような中、季節の空気を感じ、思い出に浸る瞬間、頭の片隅で恩師のことを思い返していたが、連絡の取りようもなかった。

しかし、またしても奇跡は起きた。何と今度は、その恩師が娘の副担任として数学を教えていただくことになったのだ。恩師との懇親会では師の教え子たちとも酒を交わしたがやはり話題は「Mの定理」。どんなに時代が変わっても、本当のプリンシプル（原理・原則）は生き残るのだ。こうして、恩師の教えが人の輪として繋がっていき、「次世代」の為にどのように貢献していくのか楽しみである。教育とは、最終的には社会貢献に還元されるべきものである。その本来の醍醐味を、人生を通し実感させて頂いたことに心から感謝したい。

黒木 昌  
(一般)



## 忘れられない授業

「ごめん。遊べなくなった。明日遊ぼうね。」

私が小学校のある学年のとき、ある友達から命令されて、先に遊ぶ約束をしていた友達に断りを入れたときの私の言葉です。その友達は嫌な顔をせず理解を示してくれました。命令した女の子のことが怖くて従っていることに友達は気付いたのです。「命令されたのだから仕方がない。」と何度も自分に言い聞かせましたが、そうすればそうするほど自分が悪く思えてなりませんでした。

私はまず、母に話をした後、怒られるのを覚悟で担任のN先生に話すことにしました。先生は怒るわけでもなく、真剣に話を聴いてくれました。すると、先生は私の話をそのまま文章にし、それに関わった人の名前を変え、授業をしてくれたのです。

その授業が始めると、私は胸のドキドキが止まりませんでした。私が先生に訴えたことが、関わった人に分かってしまうからです。けれども、私が遊ぶのを断った友達には私の反省の気持ちが伝わったように思います。何より私自身が、絶対に同じことを繰り返さないと強く決意することができました。そして授業の後、友達に素直に謝ることができました。

N先生へ

先生が書かれた通信に「何か問題が起きた場合、当事者になったときに今日の決意が試されます。楽しみです。」とありました。あれから似たようなことがありました。「それはできない！！」ときっぱり断ることができるようになりました。それは先生のあの授業があったからです。ありがとうございました。

孝子 友萌

(中学生)

## 数え切れないほどの感謝

私を変えた先生は中学校3年生の担任だったF先生です。

私は中学校3年生のとき、生徒会役員、バレー部のキャプテンなどを勤め、毎日がとても忙しく、それに加えて友人関係のこともたくさん悩みを抱えていました。

誰にも「きつい」と言えず本当にしんどかったとき、F先生から「最近元気ないね。きついことないの。話聞こうか。」と声をかけてもらい、すごく嬉しくて泣きそうになったのを覚えています。

そして、2人で話をしているときに、涙がたくさん出てきて、先生は「きつかったね。気付けなくてごめんね。」と言ってくれました。そのとき自分の話を聞いてくれる人がいてくれたことにとても幸せを感じました。

もしあのときにF先生が声をかけてくれなかったらずっと下を向いて前に進んでいけなかったと思います。先生に全て話をして、そのときのF先生からの「頑張れ」の言葉が一番嬉しかったし心強かったです。背中を押して応援してくれた先生がいたからこそ受験も部活動も友人関係も乗り越えることができました。本当に感謝しきれません。

今でもF先生に一番会いたいと思うし、会ったときは嬉しさ100%です。先生の笑顔と言葉でどれだけ自分が助けられてきたか数えられないです。私もF先生みたいに人を助けて元気を与えられるような大人になりたいと思っています。

大人になってもずっと忘れないと思うし、いつまでも仲良くさせていただきたいです。

興梠 那奈子

(高校生)

## 子どもの心に寄り添える先生を目指して

「漢字が分からないから、黒板に書いてくれる？」

転校初日、緊張していた私に先生は名前と転校前の学校名を漢字で書くようにおっしゃいました。小学校低学年から書道をしていた私は、自信を持って堂々と大きな文字で書いたのを覚えています。すると先生は「わぁ、字が上手だね！みんな拍手！」と言ってくれました。今考えると、先生は決して漢字が分からなかったわけではなく、クラスみんなの前で私を認める場を作ってくれたのだと思います。

小学校5年生の春、父の仕事の都合で転校を経験しました。高学年での転校で、「友だちができるかな。うまく馴染めるかな。」と不安でいっぱいでした。そんな私に担任のR先生はとても温かく接してくださいました。

転校してしばらく経った頃、妹が転入先の学校になかなか慣れず朝泣いていました。「私も母に甘えたい。」、張り詰めていた気持ちがあふれ、私も泣いて登校したという出来事がありました。泣きながら登校した私に、先生は「友佳さんもお母さんに甘えたかったんだよね。こらえてたんだね。いっぱい泣いていいんだよ。」と言って寄り添ってくれました。この出来事を通して、先生は私を見てくれているんだと感じ、先生のいる教室が安心できる場所になりました。

「子どもと関わる仕事をしたい」と思い始めた私は、現在養護教諭として働いています。R先生のように子ども一人一人を認め、心の声に耳を傾けることができているのかと自分に問いかけ、まだまだ力不足を感じることが多い毎日です。子どもたちの心に寄り添い、一緒に笑ったり泣いたりできるようなそんな養護教諭を目指してこれからも頑張っていきたいと考えています。

小林 友佳

(一般)

## 私を変えた先生との出会い

1971年3月、宮崎県立延岡高等学校の卒業式当日に、その後の私の人生に大きな影響を与えたお二人の先生から伺った「言葉」を今も忘れない。

お一人の「言葉」は、当時の校長先生で卒業式式辞での言葉である。

「生涯勉強。高等学校の卒業は勉学の終わりではない。人生は生涯勉強である。」

御丁寧に我々の卒業アルバム巻頭の校長写真には、先生自筆の「生涯勉強」の一筆が添えられている。既に、関西の大学への進学が決まっていた私は、当然「4月から新たな勉強が始まる。」と覚悟はしていたけれども、校長先生の手紙を「大学卒業後も、死ぬまで勉強かよ。」と多少げんなりした記憶がある。

その後、市役所へ奉職し38年間勤めた。在職中も、定年退職して5年以上がたった今でも「ふーん。そうなのか。今の今まで知らなかった。」と、日々学ぶことは尽きない。正に「生涯勉強」だろう。そのように思うたびに校長先生の式辞の一言を思い出す。ちなみに同校を卒業した長男の名前には校長先生の名字を使っている。

もうお一人のお言葉は、その卒業式後、最後のホームルームで学級担任のH先生が我々に送ってくださった言葉である。

「これからの人生を『ひたぶる心』を持って生きていってほしい。」

無学な18歳の少年であった当時の私は、ぼんやりとしかH先生が仰られた「ひたぶる心」の意を理解できなかった。「ひたすらな心」的な理解で終わっていた。

しかし、高校卒業後46年経っても先生の言葉の真意を理解できたのかと問われれば心許ない。多分これは先生から「己のなすべきことを求めて、一心不乱に君の人生を生きてきたか。」と問われて即座に「YES」とは言えない生き方をしてきたからではなかろうかと自問・自省する。

少年期を過ぎ、青年前期を迎えたあの年頃に、このお二人の「言葉」は今もって重く、その後の私の人生に、いつまでも真正面から「我が生き様」の是非を問いかけてくる。

残りの人生も、このふたつの「言葉」を大切に生きていきたい。このお二人をはじめ、数々の薫陶をいただいた、たくさんの先生の言葉は、多岐多様にして、かつ重く「私を変えた先生との出会い」であったと言えよう。

—学ぶとは誠実を胸にきざむこと、教えるとは共に希望をかたること—(ルイ・アラゴン)

佐藤 理洋  
(一般)

## また歌いましょう

「あなたたちは先生の自慢です。」

3月31日、私を変えてくれた先生はその言葉と涙を残して私たちの小学校を去って行った。

私は小学校4年生のときに合唱部に入った。そのとき私に自分を変えようという気持ちはなく、ただ友達が入ったから入っただけであった。私は気持ちを口にしたり人前に出て話をしようとしたりすると嫌われたらどうしようと不安になり、口が動かなくなってしまう。そのため、みんなと歌うことも得意ではなく、辞めたいと思うこともあった。

そんなとき、私を支えてくださったのは先生だった。先生は一人一人が楽しく歌えるようにたくさんの工夫をしてくださり、何よりも先生が何気なく口にされた言葉が心に響いた。

「他人は自分の気持ちなんてわからない。だからこそ言葉で、歌で表現するんだ。」

当たり前のおしゃっただけなのかもしれないが、私はその言葉のおかげで目の前が明るくなった。そして自分の気持ちを相手に伝えるためにたくさん話をしたり、歌ったりするようになった。

6年生になり副部長に任命された。以前の私ならきっと自分に自信がなくて部長に仕事を任せてばかりいたと思う。しかし私は変わった。自分の仕事は自分でこなし、自分の意見をしっかり言えるようになった。私はそんな自分が好きだった。

この3年間で色々なことがあった。沖縄、佐賀、熊本での九州大会出場、先生が骨折をされて、先生の旦那さんに指揮をしてもらったコンクール。思い出はどれも先生のおかげで楽しくなった。私は先生にとっても感謝している。また一緒に歌える日まで、よく仰ったように「勇気」と「自信」を持って歩み続けよう。

辻 花成子  
(中学生)

## 先生の「当たり前」の考え

「おめでとう。良く頑張ったね。」

私の手を取り、握手をしながら満面の笑みを浮かべそう言ったのは中学校生活3年間の中で一番私の考え方を教えてくれたO先生です。高校受験の合格発表後、合格者が集まる体育館で1人1人に「おめでとう」と笑顔でおっしゃっていました。私と先生が出会ったのは中学校入学式の日で、朝教室に行き「おはよう。」と今では聞き慣れたすぐに「O先生だ。」とわかる挨拶を交わしたときです。

しかし、O先生のことを知っている方に「一番怖い先生に当たったね。」と言われ、不安な気持ちで過ごしました。学校生活を送る中で私が見つけた先生は「怖い。」ではなく「悪いことは悪い。」とはっきり言う先生でした。そんなO先生に変えられた考え方は「積極的に動かなくても大丈夫。」という考えです。

小さい頃から内気な性格だった私は人前に出ることが好きではなく常に人と同じように行動をすることだけしてしていました。ですがO先生は違いました。県の体育関係の仕事など、する人がいないときには「私がします。」と言い、自ら引き受けて「らせていただいております。」という気持ちでされていました。その話を聞いたとき、自分と正反対の先生の考えに、私も少しだけでも積極的に動いてみれば考え方が変わるかとも思い委員会の委員長や副委員長をしてみました。

そこから少しの人数なら人前に出ることが平気になり内気な性格も変わってきました。O先生の「当たり前」が私を変えてくれて今でもとても感謝しています。

濱砂 凧紗

(高校生)

## 人間味あふれる先生との出会い

小学四年の娘が、友達からいじめられたと言う。学校の帰り道、下校班の一人の子に突き飛ばされて、肘を擦りむいて帰ってきた。他にも背後からランドセルを開けられたり、くすくす笑われるとか。

親としては黙っておれないと学校に電話した。わが家はその半年ほど前に県外から引っ越して来たばかりで、学校の様子もわからず不安だったのだ。

先生は、その日に家まで来てくださった。そして「任せてください」と請け合って色々な対策を考えてくださった。

先生が帰られた後、娘が言った。

「あの先生、いつも大声で怒鳴ってすごい怒るこわい先生なんだよ」

びっくりした。私に話してくれていた時の先生は、話の面白い温かな先生だったからだ。先生のおかげでいじめの問題は見事解決した。

学年末のお別れ会の後、娘が「あの先生、ギターを弾きながら歌を歌ってくれたよ！」と報告してくれた。そんな特技もあったんですね、先生！とまた、びっくりした。

温かくて、厳しくて、ユニーク。すっかりそれが私にとっての「宮崎の先生」の印象になった、先生との出会いだった。

引っ越してくる前の地域の先生方と何かが違う、と感ずることがある。それは多分、とっても「人間らしい」と言うことなのだと思う。

怒ったり、心配したり、いつも本気でしてくれる。そんな人間としての魅力あふれる宮崎の先生方、いつも子供達がお世話になっています。

これからもよろしくお願ひいたします！

東峯 有見香  
(一般)

## 先生との約束

先生との出会いは私が小学校5年生のときです。特認校制度により体験でT小学校に行きました。その時に会ったのがI先生です。

先生はマジックをして初対面の私たちに明るく接してくれました。授業もわかりやすく、面白い夢のような授業でした。それだけではなく、先生はとても優しくて私が間違えたことを発表しても、その答えを否定するのではなく優しくアドバイスをしてくれました。私は先生に色々なことを教わりたいと思い、T小学校への転校を決めました。

転入してすぐに私は6年生が2人という状況に戸惑いました。しかし先生は私たちにプレッシャーをかけることもなく、「楽しく自由に学校生活を送ってこれからの自分に繋げられる充実した1年にしようね。」とおっしゃいました。

その言葉のとおり、私は色々なことに挑戦しました。大きな舞台で代表あいさつをしたり、今までの自分では想像できないようなことに挑戦したり、そのことが今の自分を作り上げてくれたのだと思うと先生には感謝しかありません。

小学校も卒業に近づいたころ、私たちは将来の夢について発表しなくてはなりませんでしたが。しかしそのころの私は将来の夢が決まっておらずとても悩みました。

悩んだ結果、「好き。」を仕事にしたいと思い、自分の「好き。」を探しました。私が一番好きなのはI先生で、特に社会の授業が好きだと気づきました。私はそこでI先生のようになりたいと心から思いました。

そして、そのことを発表すると先生は私の背中を押してくれました。

「君は社会の先生にぴったりです。だから10年後私と一緒に働けるように頑張れ。」と先生に言われて私は小学校を卒業しました。だから、どんな辛いときも、その約束を果たすため、先生の言葉を励みに頑張っています。

前山 皓耶  
(高校生)



## 年賀状

平成25年のお正月、実家に帰省し小中学校の同窓会へ参加し、自宅に戻ってくるとたくさん年賀状が届いていた。届いた年賀状に顔をほころばせながら見ていると、流れるような文字で書かれた年賀状があった。それは私が小学校1年生のときの先生からのものだった。

小学校、中学校、高校、社会人となってからも先生との年賀状のやりとりはあったが、数年前から先生の年賀状が届かなくなり音信不通となっていた。先生への懐かしさと嬉しさで、先ほどまで同窓会で当時の友達と一緒にいたという偶然、ものすごいタイミングの良い年賀状に興奮し、すぐに当時同じクラスだった友人に電話した。

どうやら先生の年賀状によると、今年88歳の米寿を迎えるらしい。そのことを友人に話すと、先生の米寿のお祝い会をしようとすぐに話がまとまり会の計画をした。準備期間や先生の体調などを考慮して暖かくなった春に開催しようとなった。

平成25年4月、小学校の体育館で「先生の米寿をお祝いする会」が始まった。何も聞かされず、小学校体育館に連れてこられた先生は本当に驚かされていた。

先生にまず名簿を渡し、まずは点呼確認から始まった。先生に名前を一人一人呼ばれながら、大人になった私たちは、みな大きな声で「ハイ。元気です。」と返事をした。当時の写真と現在の写真をおりまぜて作成したビデオをみんなで笑いながら鑑賞した。

生徒を代表して、友人が毎年届いていた年賀状で、「大学受験の年、大変だろうけど体が一番。体を休めて早く寝なさいというようなことが書いてあった。先生でありながら、祖母のような応援をしてくれていることが大変嬉しかった。」というような話をした。

私も先生からくる年賀状には、先生であるけれどもどこか祖母からのような心温まる年賀状のやり取りが大好きで、友人の話にじんわりと込み上げてくるものがあった。

先生は当時の様子をととても懐かしそうに話をしていた。当時、進級した私たちは放課後になると、先生のいる教室に来てなかなか帰らなかったこと。友人は、家でとれた竹の子をたくさん教室に持ってきてくれたこと。たわいもない日常の出来事が先生の心の中に残っていた。当時とは少し様変わりした小学校と先生と私たちは「みんな懐かしいね。」と笑顔で写真に納まった。

翌年、「結婚はしていないけれども住所が変わりました。」と先生から年賀状が届いた。

横山 雅美  
(一般)

## 厳しく指導してくれた先生

私が小学校3、4年生のとき、剣道がだるくて、最初にすぶりでだらだらしていたら「貴紀、もっとしっかり竹刀をふらんか！そんなんやからずっとそのままやとよ。」とK先生に教えられました。

K先生は小学校の理科の先生で、剣道もとても強かったです。授業のときは優しく詳しく、剣道では厳しく、丁寧に指導してくださいました。

しかし、私が小学校5、6年生になる前に、K先生は私たちの学校を離れていきました。

最後の練習では、先生に向かっていく「かかり稽古」をしました。そのときはいつもより気合いが入りました。

離任式ではみんなが泣いていました。しかし、今でも試合を見に来てくれたり、アドバイスをしてくれたりしてくれます。

先生の厳しく丁寧な教えのおかげで、どんなにきつい練習も頑張っています。今度会うときは褒めてもらえるくらいの良い試合をしたいと思います。

渡邊 貴紀

(中学生)